# 源氏物語における女三宮事件の意義 (二)

## ――密通事件を中心として――

重松信弘

## 一

前号で女三宮事件の前半降嫁事件を取扱ったので、本稿ではその後半の密通事件を考察する。降嫁事件に密通事件を引起す契機はあるが、それは必然的なものとはしがたい。密通事件は積極的には柏木という特異な人間によって、消極的には女三宮という柏木とは違う意味の特異な人間によって、引起こされたものであるが、柏木が積極的であるという意味で、この事件の主たる責任者である。女三宮の方が主要だとする説もあるが、宮は受動的に終始しており、その文芸的感動も柏木より弱いから、主たる責任者とすることはできない。源氏は当事者ではないからこの事件の主役ではないが、当事者とは違う意味の苦悩を味っており、また源語が源氏の物語であるという長篇的物語の観点から、更に別の意味を持っている。この事件のシテ役は柏木、女三宮はツレ、源氏は重要なワキ役であるが、長篇的物語の観点からは、源氏にはワキ役とするだけではすまされない意味がある。

降嫁事件には、当時としては四十歳の初老の源氏が十三・四歳の少女女三宮を娶るという異常さはあるが、それを宮の父朱雀院が望み、正常な手続きを経ているから、社会的には異常な事件とはいえない。これに反して、密通事件は権勢並ぶもののない源氏の正妻を犯したのであるから、まさしく異常な事件である。但しこれは表面には出ず、その直接的な影響は当事者と源氏との三人で終っているが、間接的には朱雀院に及び、柏木の妻落葉宮に及び、もっと広い意味では不義の子薫にも及んでいる。しかしそれは殆ど事件後の問題であり、この事件で主として究明すべき課題は、柏木の異常心理が第一であり、次にそれを受けた女三宮の性情の特異性であり、更にこの事件で大きな打撃を受けた源氏の思想・心情である。

以上は当面の研究課題であり、この事件究明のため欠くことのできない重要な問題であるが、更に広い視野に立って、この事件の意義を考えることも必要である。それには(1)藤壺事件との因果応報の問題があり、また(2)源氏の中年期を受けて宇治十帖への道を開く構想の問題があり、更に(3)中年期の「現世的あはれ」の追求から、宇治十帖の仏教へ傾斜する思想進展の問題がある。(1)は源語の底流たる仏教思想の厳粛な律法的道義性を示すものであって、「あはれ」を

深くするものであり、(2)と(3)とは表裏していて、この密通事件が降嫁事件と共に、今まで専ら追求してきた現世的価値を、宇治十帖が追求する仏教的価値へと転換さす枢軸たる意味をもつものである。但し前に述べた当面の課題が、直接的にこの事件の文芸的意義を表すものであり、それは若菜上下と柏木との巻で考究せられる。ここではその当面の課題の考察に主力を注ぎ、その後で広い視野に立つ問題にも及ぶこととする。

## 二

密通事件の主要な原因は、柏木が異常心理ともいうべき情熱を以て、女三宮を恋慕したことにある。若菜の巻以前の柏木は目立つ存在ではなかった。玉鬘をめぐる求婚者の一人で、玉鬘に恋歌を送ったりしており、源氏は、まだ下臈だが、その人がらは公卿にも劣らぬとほめている。和琴が上手であり、また源氏の賀には夕霧と共に舞ったりもしている。しかしさがな者の近江君(父頭中将の落し子)をさがし出して、父を困らせたりもしており、なよび過ぎて思慮が十分でない所もあり、密通事件を起こす心と通う点もないではない。夕霧とは甚だ仲がよくて、それは源氏と頭中将との親同志の仲にも似ているが、二人の性格はよほど違っており、夕霧は女三宮に傾く柏木を早くから心配しており、密通をうすうす知っては、その心弱さを軽蔑している。

若菜の巻で朱雀院が女三宮の聟選びをする頃から、柏木の人がらが多少変ってくる。朱雀院は柏木を「高き志(高貴の人を妻とした い心)深くて、やもめにて過しつつ、いたくしづまり思ひあがれる気色」と評し、父頭中将も「今まで一人のみありて、内親王達ならずば得じと思へる」といって、女三宮の降嫁を希望している。これは柏木の素志のようであるが、是非とも内親王を望むということは前に玉鬘に求婚したことと矛盾する。このような柏木を、若葉の巻で顕著な野心家としての面貌を唐突に示すとする説もあるが、柏木は高望みはするが、野心家ではない。それも必ずしも手の届かぬ望みではなく、女三宮の時はまだ下臈で得られなかったが、後に中納言に昇進して女二宮を得ている。皇女を娶ることによって、地位・権勢でも得ようとするなら野心家といえるが、柏木にはそんな思いはなく、宮の愛が得られるなら、共に世を逃れてもよいと思うほど、利害を超越した純情さがあり、一徹であり、恋に殉じて悔いない人間である。

柏木がさほど優れた女でもなく、夕霧が軽蔑する女三宮に対して命をかけて恋慕する心理は、異常という外なく、恋慕の理由は必ずしも吾々を首肯さすものではない。そこに柏木の一方的にしか物の見えない心の狭さがあり、人間としてのスケールの小ささがあり、到底源氏と対抗できる人物でないことが示されている。それと共に恋に殉ずる心には、哀切極まりないものがあって、その心情からは高い文芸的感動がかもし出されている。以下密通に至るまでを異常心理者と見、密通後は哀れな弱小者と見る立場で、柏木を検討する。

(1)柏木が女三宮を思うようになった根元は、柏木の語らい人である宮の女房小侍従の母が、宮の乳母であって、柏木の乳母の妹であ

るという関係から、宮が幼い時から「いと清ら」であり、帝が大切に育てられていると聞いていたためである。このことが先入観念となって、先にあげたような内親王を是非娶りたいと思うようになったのであろうが、源氏・頭中将・夕霧なども若い時に、このような望みは持たないから、このような望みを強く懐いて動かないのは、異常な心とすべきである。

(2)源氏に宮の嫁降があると、「いと口惜しく胸いたき心地」がして、なお思い切れず、源氏には出家の本意があるから、もし出家したらその後をと、油断なく宮に注目するという。これも驚くべき異常心理である。

(3)六条院での蹴鞠の節、逃げ出す猫の紐で簾が上がり、初めて宮をほのかに垣間見て思慕の情にたえない。しかし源氏の立派な姿をみては、宮が自分に情をかけてはくれまいと、「胸のみ塞がり」、夕霧と同車して退出する時、源氏が宮を厚遇せず、宮が「屈し給ひたらむこそ心苦しけれ」と、余計なことをいう。夕霧がそれを否定すると、なおも「いで、あなかま。給へ。皆聞きて侍り。いとほしげなる折々あなるをや」と、躍気になって抗弁して、宮を「いとほし」がる。自分にかかわりのない他人の内輪ごとに立入って、余計なお世話を焼くのであるが、柏木にはそうせずにはおれない異常な心があり、夕霧はそれをわずらわしく思う。

(4)柏木は思い余って小侍従を介して宮に恋歌を送るが、返事はない。それも道理とは思うが、何とかして近づき、一言でも話したいと思う。それについては草子地で、「院（源氏）の御ため、なまゆがむ心や添ひたらむ」という。「なまゆがむ心」に註釈書は「反逆心」「反逆めいた心」「何となく面白くない曲った心」「妙に怪しからぬ心」「素直でない心」などという解釈をしているが、これは密通にまで至りかねない不逞・不遜な思いであり、異常心理という外ない。柏木の様子がその後もおかしいので、夕霧は「なほいと気色異なり。わづらはしき事出で来べき世にやあらむと、われさへ思ひつきぬる心地す」と、ひどく心を痛めている。よそ目にも分かるほど思いつめた柏木が、何かよくない事を引起こすのではないかということを、草子地と夕霧の思いとで予告しており、後の密通がこで匂わしてある。

(5)このような心を懐くから、六条院で「大臣（源氏）を見奉るにも気恐しく、まばゆく、かかる心はあるべきものか。なのめにてだにけしからず、人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを、ましておほけなき事と思ひわびて、かのありし猫をだに得てしがな。思ふこと語らふべくはあらねど、かたはら寂しき慰めにてもなつけむと思ふに、もの狂ほしう、いかでかは盗み出でむと、それさへぞ難き事なりける。」という。前半は(4)の源氏に対する不逞な心（密通にも至り得る心）をわれながらあるまじきことと反省するもの、後半の猫のことはまさしく異常心理の典型であり、も早や気違いじみている。

(6)一策を案じて宮の猫のことを東宮に啓し、東宮が明石女御を介して女三宮から猫を借りると、それを「あながちにをこがましく」は思いながらも借りて来て、猫の世話をして撫で養い、「ねうねうと、いとらうたげに鳴けば、かき撫でて、恋ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなく音なるらむ」と歌をよみ、東宮から猫

を返せと催促があっても返さない。これは前の気違いじみた思いを実行に移したもので、病膏肓に入るというべきである。

この後新帝の即位、源氏の豪勢な住吉参詣、六条院の女楽などのことがあって、紫上が病気になり、療養のため二条院に移ったので六条院は火が消えたようになる。この頃柏木は中納言に昇進して女二宮を得た。(7)女二宮は人がらもすぐれていたが、女三宮のことが忘れられず、小侍従に語って宮にただ一言、心のほどを告げたいからといって手引きをたのむ。小侍従が固く拒むのを、再三再四強引に迫って承諾させ、ついに人気のない夜、寝所へ侵入して宮を抱いて床におろし、今までの思いを切々と訴えるが、狂気の沙汰という外ない。宮は「わななき給ふさま、水のやうに汗も流れて、物も覚え給はぬ気色、いとあはれなり」というさまで、何の反応もない。「気高うはづかしげにはあらで、なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見え給ふ御けはひ」に、「さかしく思ひしづむる心も失せていづちもいづちもゐて隠し奉りて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えて止みなばやとまで、思ひ乱れ」て宮を犯す。これは今までの思いが昂進して、全く恋情に身を任せ切ったさまで、あとはどうでもなれという捨鉢的な異常心理である。

以上七項目に分けて柏木の心理を検討したが、この柏木の異常な心が密通を引起した主要な原因である。それにしても柏木が接近した時、女三宮に薫に対する大君ほどの強さはなくても、せめて夕霧と小野の山荘で一夜を明かした姉女二宮（落葉宮）ほどの心があるならば、柏木は宮を犯さないさまに描いてある。その意味では女三宮にも責任の一半はあるが、それはあくまで受動的であり、消極的意味においてである。因縁相合して事が成ずるとすれば、因は積極的な柏木にあり、宮は縁の役目を果たしていたにすぎない。それにしても、初回は止むを得なかったとしても、その後わりなく思いながらも度々柏木に会い、ついに妊娠したのであるから、宮の罪も軽くはない。

しかしまた思うに、柏木が宮に対して思う心だけを述べ、「あはれ」との一言を期待して満足するというのは、宮を犯してはならないという理性による意識的事実ではあっても、無意識の心理はあくまで宮を手に入れたかったのである。柏木自身が意識的には自覚しなかったとしても、そのことは十分匂わしてある。単に志を述べて引下るというだけの、プラトニックラブに止まるのであるならば、源氏に対して「なまゆがむ心や添ひたらむ」とか、気恐ろしくまばゆくて「かかる心はあるべきものか」とか、「おほけなき事」と思い侘ぶとかいう大げさな表現はふさわしくない。また夕霧が「わづらはしき事」が出てくるだろうと、心を痛めるはずもない。策をめぐらして猫を手に入れ、これを愛撫するなどという情熱は、志を述べるという精神的なことだけで納まるような生まぬるいものではない。たとえ女三宮がなよなよとしていなくても、柏木の無意識の心理では始めから宮と通ずる意欲を懐いている。

夕霧は柏木の密通を感付いており、その死後「すこし弱き所つきて、なよび過ぎたりしけぞかし」と批判している。確かに心弱さが根本的な原因となっているが、それだけではない。宮に接して、期待した高貴性のないことに失望を感ずるが、それを少しも気にしないで、いなそれによって却って気安くなって宮を犯したのは、彼が

求めていたものが、彼が宣言した宮からの精神的愛顧ではなく、初からもっと次元の低いものであったことを示すものである。彼の本心―無意識の心理―はあくまで宮を得たいのであり、夕霧が心を痛めたような事態の起ることは、各所で匂わしており、密通は当然起こるべくして起こったのである。あれほどの異常心理を描いては、密通が起こらなくては収まらないのであり、逆に密通に至らないのなら、あれほどの異常心理を描くことはないのである。

柏木の異常心理は彼が一方的にしか物が見えない知性の弱さ・識見の低さを示し、人間的な拙なさを示すものである。宮がはかなくこめかしくて、勝れた女でないことはしばしば述べられており、源氏も甚だ物足りなく、時には軽蔑に近い思いさえ懐いている。蹴鞠の場で同時に女三宮を見た夕霧は、「なほ内外の用意多からず、いはけなきはらうたきやうなれど、うしろめたきやうなりやと、思ひおとさる」と、宮の用意のなさ（このことは後に密通露見の原因になる）を軽蔑するが、柏木は「胸つと塞がりて」ひたすら気が引かれる。宮の猫を借りて愛撫するなどいうのも、病的な愛執を示す変態心理であって、正常な人間の心ではない。源氏が藤壺を恋いし、紫上を愛し、明石上を重んずることには、人々を頷かせるだけの十分な理由があるから、源氏を健全な心の人と思わすが、柏木の恋慕にはそれがなく、多分に自分で映像を描いて、一人相撲をとっている感がある。これは源氏や夕霧のような勝れた人間のすることではなく、柏木が拙ない人間であることを示すものである。

またこの後その未亡人の落葉宮と夕霧との恋物語が展開するが、その物語で落葉宮は女三宮よりもはるかに人品・態度がすぐれている。思慮があり、「物のあはれ」を知るよい妻を得ていながら、その善さを見ることができず、拙ない宮に囚われて身を亡ぼしたのも柏木の人間としての拙なさ―知性が弱く精神的な健全性・高貴性を欠くこと―のためである。藤壺を恋し、紫上を愛する源氏と、大君に心を傾け尽くす薫とは、相手の女がすぐれているために、おのずからすぐれた男となる。いなすぐれた男だから、すぐれた女を恋したのである。落葉宮に恋した夕霧も、柏木よりは目が高くて、柏木よりすぐれた人物である。

この一面的にしか物の見えない拙ない柏木の人間像は、六条院体制を破る必要のため造型されたのである。堅牢な六条院体制は内部からは破れず、外部から破るとしても、健全な人間のまともにできることではない。柏木のような目の見えない拙ない一徹者と、それに流される宮のようなはかない人間とによってのみ、初めてそれが可能となる。密通事件はこのような新らしい人間像を創造すると共に、これによって六条院体制を傷つけて、物語の世界に新たな道を開くものである。なお柏木が右大臣の四の君を母とすることは、或いは右大臣・弘徽殿女御・朧月夜というこの血統の人々の人間的な拙なさと、通わせる意味を持たせたのかも知れない。

## 三

密通以後の柏木と女三宮とについて検討する。柏木は表面的には落付いてみやびやかであっても、内心は毅然たる所がなくて弱いが、宮は表面的にも内面的にも弱く、それと共に二人とも性質は善

良で、小心である。密通露見後の二人が源氏に会わせる顔がなく、生きておれないように思うのは、このような性質のためである。露見は宮が柏木の手紙をしとねの下に入れ忘れて、源氏に見付けられたためであるが、そこに宮の用意なさが示されると共に、柏木も万一の場合を思って、誰の文とも分らないように、おぼめかしく書く用意を欠いており、源氏はこの柏木の用意なさを軽蔑している。源氏があれほど好色事をし、また父帝の后を犯してもボロを出さなかったのに比べて、柏木と宮とはあまりにも幼なくて、慎重さを欠いている。

柏木は密通露見の後、ただひたすら源氏を恐れ憚って、今までのように六条院にも出かけず、引籠って淋しく日を過ごす。朱雀院の賀の試楽に招かれて、気が進まないままに不承不承出かける。源氏は案外何事もないさまに話し、柏木も試楽の手伝いをするが、終ってからの酒宴の席で、源氏は痛烈な皮肉をいう。「過ぐる齢にそへて酔泣こそとどめ難きわざなりけれ。衛門の督（柏木）心とどめてほほ笑まるる、いと心はづかしや。さりとも今しばしならむ。さかさまには行かぬ年月よ。老いはえのがれぬわざなり」と柏木を見やる。人よりも沈んでおり、気持も悩ましくて、面白いことも目にもとまらぬ心地がしている柏木に、「さしわきて空酔しつつ、かくのたまふ」ので、たわぶれのようでも、柏木は「いとど胸つぶれて」その席にいたたまれず、気分も悪くなって、中座して退出する。ここで源氏が「衛門の督心とどめてほほ笑まるる。いと心はずかしや」というだけで、柏木は鋭く胸を刺されている。お前はわが妻を犯して勝ち誇っている。老いた身は恥ずかしいという程、強烈な皮肉はあるまい。表面は自嘲のようでも、凡てを知っているのだぞ。勝手な真似はするな、という怒りの心が潜んでいる。然るに、源氏の柏木に対する態度は寛容であり、柏木に対する敗者の意識を、自ら諾なう気持もあるという説があるが、それは文意を表面的にだけ解するもので、賛成できない。女敵であり、怒りを感じている相手に、本気で敗北意識の愚痴を述べたりすることが、あるであろうか。戯れのようでもこれが痛烈な皮肉であることは、屈託している柏木を特に目ざしていうことと、わざと酔った真似をしていうことで匂わしてある。本当にそれが単なる自嘲の愚痴であるのなら、わざわざそれをここに書くことはない。またそれを柏木がその場で直ちに―恐怖の自己増殖をするといういとまもなく―その意味する所を直覚して、「いとど胸つぶれて」いることでも明らかである。

また源氏は咎めないのに、柏木が一人で恐れているという説もあるが、それも当たらない。「見合せ奉りし夕の程より、やがてかき乱り、惑ひそめにし魂の、身にも返らずなりにしを」というのは、源氏に咎める気のあったことを感受したものであって、それがないのに心の鬼だけで、一人で妄想を作り出して苦しんでいるのではない。無名草子が怖じ憚って来ぬ柏木を、源氏が無理に呼出して、「とかくいひまさぐり、果ては睨み殺し給へる」というのは、いい過ぎであるにしても、源氏の言葉・空酔の態度・わざと柏木を見る目などに、柏木を許さぬ心があり、柏木はそれを鋭く感じて、ついに自滅したのである。

気の弱い善良な柏木が源氏に咎められ、身のおき所のない思いがして、死を以って罪を償おうとする心は悲しい。宮との密通は責め

らるべき不義ではあるが、当時の男女関係は緩かったから、それほどひどく責められるほどの罪ではなく、柏木もそれを十分知っている。それにもかかわらず、死による償いを思ったのは、源氏の人間的偉大さ、それに相応する社会的勢望などに圧倒されて、源氏の咎める気持を自己増殖して、恐怖の思いを強くしたためである。

密通が露見してから柏木の死ぬまでの思いは、実に悲しいが、柏木の巻頭の一文がかなりよくその思いを描いている。柏木の心身のなやみはよくならないままに年を越す。父母の歎きをみるにつけ、「強ひてかけはなれなむ命かひなく、罪重かるべきことを思ふ心は心として、またあながちにこの世に離れがたく、惜しみとどめまほしき身かは」と、父母に対しては罪が重いとは思いながらも、命を惜しいとは思わない。幼時から人に勝ろうと高い望みを持ち、その望みの躓いたこともあって、出家しようとも思ったが、親の歎きを察して何とか今日まで過して来た。それに「つひになほ立ちまふ(世の中に交わる)べくも覚えぬ物思ひの、一方ならず身に添ひにたるは、われより外に誰かはつらき。心づからもてそこなひつるにこそあめれと思ふに、恨むべき人もなし、神仏をもかこたむ方なきは、これ皆然るべきにこそはあらめ」と、まことに悲しくもけげな思いをしている。そして更に人は永遠に生きるものではないから、少しでも宮に「あはれ」と思ってもらえることを、死の思出ともしよう。また不埒な奴と思う源氏も、死ぬることで許してくれるだろう。それにしてもなぜこのように、生きておれないように、我身を窮迫させたことだろうと、流れる涙がとどめられないのである。死を覚悟して父母を思い、宮を恋い、源氏に侘びる。そしてここまでわが身を窮迫させたのは、全くわが心によることであるが、これもさるべき宿世によるのだろうと諦らめながらも、なおこの境地に陥ったことが、悲しくてならないのである。

この後宮に対して、死んでもなお恋慕の思いが残る旨の文を送り、その返事を得て、また同じ思いの、死んでも宮を思い切れない旨の歌を送る。父頭中将は力をつくして加持祈祷をするが、よくならず、そのうちに宮が子供(薫)を生んだこと、宮が出家したことを悲しく聞き、見舞に来た夕霧に源氏への取りなしを頼む旨の遺言をして亡くなる。

紫上・源氏・八宮・大君など出家しない人でも、心ある人は死を思っては仏道に心を寄せるが、柏木は心を寄せない。柏木にも宮への執心で、仏道に入れないことを悲しむ思いがないわけではないが、それは甚だ弱く、宮への歌に「今はとてもえむ煙もむすぼほれ絶えぬ思ひのなほや残らむ」とも、「行方なき空の煙となりぬとも思ふあたりをたちは離れじ」ともあるように、あくまで宮に執着して、迷える魂となることを辞さない心である。密通に至るまでの異常心理は、死に臨んでも堅持されている。柏木は地上の愛に生きて、地上の愛に死んだ人であり、その心に仏道はない。女三宮が仏道に入り、紫上・源氏が仏道に心を寄せ、宇治の八宮・大君・浮舟も心を寄せるが、このような心ある人々の生き方からみれば、柏木は恋に心が乱された罪深い人である。柏木の死は地上の愛に殉ずる一徹な純情を悲しますと共に、人間の業ともいうべき愛欲に執することの味気なさ、罪の深さをも思わす。夕霧の「いみじうとも、さるまじき事に心を乱りて、かくしも身に代ふべき事にやはある。

（中略）さるべき昔の契りとはいひながら、いと軽々しう、味気なき事なりかし」という批判は正しいが、彼は人間的な弱さに負けて、何ともできなかったのである。

女三宮の人柄は既に降嫁事件で明らかにされている。その初は柏木の激情に流されたのであるが、柏木が源氏より劣っていると思い、またわりなくも思いながらも、逢瀬を重ねたことを思うと、必ずしも流されたとだけはいえない。無名草子が「余りにいふかひなきものから、さすがに色めかしき所のおはするが、心づきなきなり」というのも首肯される。前の柏木の「今はとてもえむ煙に」の歌に対して、「立ち添ひて消えやしなまし憂きことを思ひ乱るる煙くらべに」と返歌を書き「後るべうやは」（柏木が死んだら自分も死ぬる意）と書き添えている所をみても、柏木に心を寄せていないとはいえない。このような心があるから、宮は源氏に会わす顔がないのであり、源氏も冷たいさまなので、薫が生まれた後、見舞に来た父朱雀院に泣訴して、源氏の反対を押し切って尼になる。かくて六条院の「現世的あはれ」の世界はその一角が崩れる。これで紫上は救われるが、宮は柏木が源氏に反逆したことの一翼を荷って、六条院体制にひびを入れたことになる。この事件はそれ自体悲劇の物語として高く評価さるべきであるが、長篇的立場からみれば、源氏の中年期を受けて宇治十帖への道を開く意味があり、そのことは紫上の心と源氏の心とから知ることができる。

## 四

降嫁事件は紫上に最も深刻な打撃を与え、密通事件は当事者二人を除いては、源氏に最も大きな打撃を与えた。密通を知った時、源氏は女御・更衣などに物のまぎれがあっても、それは宮仕などで互に心を交わしてのことである。そのようなことのない二人が通じたことは、甚だ心外であり、許せないと思う。しかしまた思うに、故父帝も藤壺との関係を知っていて、知らず顔せられたのかも知れない。「思へばその世の事はいと恐ろしく、あるまじき過ちなりけれと、近き例を思すにぞ、恋の山路はえもどくまじき御心交りける」と反省もし、努めて平静を装うが、それでも「物思し乱るるさま」が著しいので、紫上は心配する。

宮に対しては紫上があるにもかかわらず、今まで努めて尊重し、愛情もかけてきたが、もうそのような心にはなれないと思い、冷たくするようになる。そして「院（父朱雀院）のおはしまさむ程は、なほ心おさめて、かの（院）思し掟てたるやうありけむさだ過ぎ人（源氏自身のこと）をも、（柏木と）同じく準らへ聞えて、いたく（自分を）な軽めそ」と嫌味たっぷりな皮肉をいう。宮は涙を流して正体もないさまである。他方柏木には前に述べたように、朱雀院の御賀の試楽の宴でひどいあてこすりをいって、柏木を恐れさす。この時源氏は四十七歳であり、人間として十分成熟しているが、それでもその心は穏かでなく、二人に対して皮肉をいって、咎めずにはおれなかったのである。しかしさすがに宮の出家を惜しくも思い、また柏木が死ぬると「あはれ」に思って悼み、形見の子薫もふびんにも思うのであり、片意地に憎み通すのではなく、「物のあはれ」を知る人間の大きさ、暖かさも失ってはいない。

以上検討した所は、この事件の直接的意義であるが、なおこの事

件には藤壺事件の応報の意味が考えられ、更に源語全体の構想上の意義―それはまた源語の人生観の進展を意味する―も考えられる。源氏は宮が男子を生んだので「さても怪しや。わが世と共に、恐ろしと思ひしことの報いなめり。この世にてかく思ひかけぬ事にむかはりぬれば、後の世の罪も少し頼みなむや」と思う。前半はこれを藤壺事件の応報と考えて恐れるもので、深い反省を思わすが、後半はこの応報で来世の罪の軽減を思って自己を甘やかしている。前半の思いの深刻さに後半が水をさしており、この文全体としては、必ずしも深い恐れを表すものとはいえない。

この文から、この密通事件は藤壺事件の応報の意味で描かれたとする説と、それを否定する説とがある。もとより密通事件の主題が藤壺事件の応報にあるということは、この事件の性質・意義を考えて首肯さるべきことではない。主題ではないとしても、前の一文のように源氏が応報を思っているから、この事件に応報の思想が寄せられていることは、否定できないが、これがこの場限りの一時の浅い思いであるのか、それともっと深い意味を持つのかということを検討して、この事件における応報思想の意義を考えるべきである。物語には虚構があるから、或る一文だけを重くみると、虚を実とする誤に陥る恐れもある。ここでこの一文からこの事件には深い応報の思想があるとするならば、以上のような危険もあるから、この一文は暫らく措いて、この事件に藤壺事件の応報を源氏に思わすような性質があるかどうかを検討する。それは一つにはこの事件がそれを考えるにふさわしいかどうかということであり、二つには源氏が応報を考えるような人間であるかどうかということである。

源語には善因楽果悪因苦果の応報思想が至る所にみられて、一つの基調思想となっている。特に前世の業因を現世果において思う宿世の思想が著しく多く、それを表す宿世・契りなどの語は二百数十回にも及んでいる。外に犯した罪の応報を思うことも少なくない。このような基調思想があることを思うと、藤壺事件で源氏が幸福だけを得て、苦果を受けないということはあり得ない。但しそれには順現業（現世で果を受ける）、順生業（次生で）、順後業（二生以後で）などがあるが、順生業・順後業は分からないので、現世のことを語る物語では、順現業でなければ応報があるとはいえない。藤壺事件は源氏が父天皇の正妃と通じて男子を生ませ、この事件では天皇以上の勢威をもつ源氏の正妻に、柏木が通じて同じく男子を生ませたもので、両事件は甚だ似ている。前者で罪を犯した源氏が、後者で自分の正妻が犯された時、この物語の基調思想からみて、応報を思うのは自然である。源氏がどこかで応報を受けなければならないとすれば、この事件は源氏に順現業の思いを与えるまことに恰好な性質を持っているといってよい。

源氏は早く十八歳の時、北山の寺で藤壺との間の罪を恐ろしく思い、これが生涯の悩みとなり、「まして後の世いみじかるべきを」（若紫）と恐れている。須磨へ退転した事については、再三無実の罪を訴えながら、「かく憂き世に罪をだに失はむと」須磨で勤行に努めるのも、密通の罪を思ってのことである。わが子冷泉帝の秋好中宮に対する恋慕を、似げなきことと思い、藤壺との密通はこの中宮恋慕よりも「恐ろしう罪深きかたは、多くまさりけめど、古の好色は思ひやり少なき程の過ちに、仏神も許し給ひけむ」とも思う。

罪が深いと思いながらも仏神が許すと思うのは、気になっていることを強いて払いのけようとする慰めであり、自己偽瞞である。そのことは若紫・須磨の巻の罪の思いでも知られ、ここでも初にそれを述べており、更にこの事件で応報を思っていることで明らかである。源氏はこの事件以前に三度密通の罪を思っているから、このような事件に出合うならば、当然それを深く思うべきであり、もし思わなかったら不自然である。以上のように、この照応する二つの事件の性質と、源氏の以前からの思想傾向とからみて、この密通事件には応報の思想が当然宿されるべきものである。前の源氏の応報の思いには、以上のような支えがあり、決して軽く見るべき一時の思いではないのである。

しかし応報思想は長篇物語に流れている底流であり、理念であって、この密通物語でそれが直接的に、また目的的に描かれているというようなものではない。藤壺事件にしても宣長のいうように、遂げられない哀切な恋を描き、更にそれによって物語を展開さすのが目的であって、応報の思想を描くものではないが、それを宿すことによって、文芸的感動が思想に裏付けられて、奥深い趣を培うこととなる。源氏が藤壺事件で罪を恐れず、この密通事件で順現業を思わないとすれば、「あはれ」の感動は思想的基盤がなくて、著しく浅弱なものとなるはずである。応報の思想はこの事件の「あはれ」を深くして、文芸的意義を高くするものである。

この密通事件には応報の思想と共に、或いはそれ以上に、源氏の生涯の物語を展開さす上に、重要な意味がある。それは外面的には構想上の意義であり、内面的にはこの物語の人生観・世界観を進展さすという意味である。前号で述べたように、源氏中年期の主題は源氏の栄花の生活を描くにあり、そのためには人々の間に葛藤があってはならず、源氏は女との間に波瀾を起こさないようにして、六条院体制を築き、藤裏葉の巻で源氏の栄花・栄光は行きつく所まで昇りつめた。これは物語の世界が行き詰ったことを意味し、新らしい世界を展開させなければならないが、そのためには堅牢な六条院体制を破らねばならない。これを破るため、若くて高貴な内親王を持ち出し、慎重な聟選びの形をとって、中年期にあれほど戒慎した源氏の好色心を誘発して、女三宮を六条院に迎えさせ、紫上を瀕死の苦悩に陥れて六条院を内面的に崩壊の危機に瀕せしめたが、密通事件が危くその崩壊を防ぐこととなった。その反面、源氏は生涯をかけて築いてきた六条院の権威が冒瀆され、漸く愛情を感じつつあった女三宮を失い、形の上で六条院体制が崩されると共に、内面的にも大きな痛手を受けた。

六条院体制とは、源氏とその妻妾との円満な関係の上に、「現世的あはれ」を享楽するものであるが、これを破るためには、密通事件が必要であり、密通事件を起こすためには、柏木の異常心理と女三宮の並み外れたはかなさとが必要であった。しかしそれは当面の直接的要因であるが、もっと広く考えるならば、異常な二人の設定だけでなく、(1)朱雀院の慎重な聟選びの詮議も、(2)源氏の好色心の再発も、(3)紫上の苦悩も皆六条院体制をゆさぶるため、用意周倒に描かれた設計図の中に、配置されているといえよう。(1)は(2)を呼び、(2)は(3)を呼ぶが、源氏の半身ともいえる紫上の脱落した六条院は、魂のない形骸であるから、降嫁事件で既に六条院体制の基盤が

ゆるがされている。密通事件が皮肉にも辛うじてその崩壊を防いだが、紫上は心身ともに傷ついて、心はもとのようには源氏に戻らず、出家を希望しつつ亡くなる。降嫁事件では紫上が致命傷を受け、密通事件では柏木・女三宮が再起不能の打撃を受け、源氏は両事件で彼としては到底考えられないような深い苦渋を味わわされた。かくて六条院体制は内面的にも外面的にも破られ、その存在の意義を失おうとするが、このことは「現世的あはれ」の頼みがたさ、六条院体制の空しさを物語るものである。

この事件は外面的には源氏の中年期を受けて、宇治十帖へと構想を進展さすものであるが、内面的には今まで追求してきた「現世的あはれ」に不信の念を懐いて、宇治十帖の仏教傾斜への道を開くもので、それはこの物語の世界の人生観・世界観を転換せしめる意味を持つのである。なおこの事件を男性の好色によって苦悩する女性の悲劇的性質の追求とみる説もあるが、それは当たらない。男に好色心があるとはいえ、それによって女だけでなく、男もその責任をとって苦しんでいる。女性の悲劇的性質なら宇治十帖の方が著しい。

女三宮事件では男女共に、生きる道の理想を愛情に求めることができなくなり、結果的にはそれが苦しみの種となっている。この思想は当然仏道を指向する心であり、女三宮・紫上の心を占拠し、紫上死後の源氏の心ともなっている。大君の心をこの紫上の心の延長線上に展開するという説がある。それは誤りではないが、紫上晩年の心は源氏晩年の心でもあり、その延長線上には八宮があり、薫があり、助けられた後の浮舟があり、ひとり大君だけではない。そしてこれは六条院体制の「現世的あはれ」の追求が価値を失った後に、当然のアンチテーゼとして開かれるべき道である。宇治十帖は愛情を懐く人間の生きる道として、愛情と仏教との関係の追求を主題としており、その主題への道を源氏晩年期の物語が開いたが、そのことをなしとげたのが女三宮事件である。要するに、降嫁事件と密通事件とはそれぞれの主題を包蔵して、独自の文芸的意義を持ちながら、微妙な点で連なって、六条院体制を破る意味で協調しており、またはるかに藤壺事件と対応して応報の意味を宿し、更に源氏中年期の世界を崩壊させて、宇治十帖への道を開くという晩年期の物語の主題を成就させるものである。